日本一大きな花と葉の樹木

ホオノキ　Magnolia obovata　モクレン科モクレン属

日本産樹木のなかで葉と花が一番大きな木です。落葉高木。山腹や谷筋に多く、岩手県の山のなかではよく自生しています。

葉は長さが50 cmほどになるものもあります。昔から「朴葉味噌」など、食物を載せたり包んだりして利用されてきました。名も「包の木」に由来します。葉の成分には抗菌、抗酸化作用があり、理にかなっています。

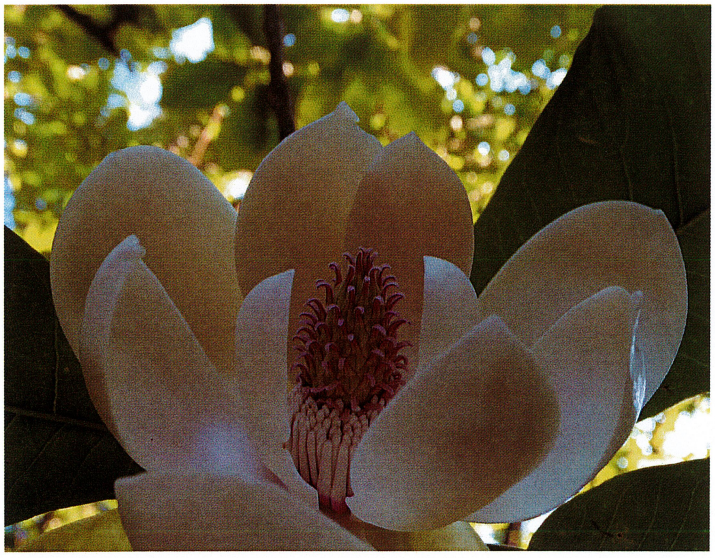
広葉樹の初期の姿が残る原始的な大型の花が咲きます（蜜はなく匂いと花粉で虫を誘います）。人の頭ほどもある大きな花は、開花した最初の日、雌しべのみが開いて「雌」の状態になります。その日の夜に一旦花びらが閉じて、次に開いたときは雌しべは閉じ、受粉できない状態になっていて、今度は雄しべが開いている「雄」の状態に変化します。ひとつの花で雌から雄へ変わることで自家受粉を防いでいるのです。

葉を１枚ちぎって大きさを体感。子供の顔より大きいのでお面にできる。

秋にできる実は、長さ 15 cmほどの長楕円形の袋果で、種子がたくさん詰まっています。熟すと紅色になり、朱色の果実が出てきます。果実は引っ張ると白い糸のようなもので鞘とつながっています。コブシを始めモクレンの仲間はおおむね同じ構造です。その理由は、鳥にアピールするためという説もありますが、まだはっきりとは解明されていません。不思議な謎が残されていて面白いです。果実は鳥たちやリスなどの食糧となっています。

【果実】裂けて朱色の実が顔を覗かせている。

材は、特徴的な緑がかった灰色。狂いが少なく軽くて柔らかく加工がしやすいので、さまざまなものに利用されてきました。下駄や彫刻が有名ですが、仏壇、寄木、器具材、椀、皿、盆、建具などにも。特殊な用途としては、日本刀や槍の鞘材。金属に触れても錆びない特徴があり、材が柔らかいことで刃物を傷めないことから、昔からホオノキだけが使用されてきました。



【雌性期】6/7
開花直後の花。真ん中の赤い雌しべが開いてイソギンチャクのように見えます。下にある白い雄しべは閉じています。

【雄性期】6/9
真ん中の雌しべはピッタリと閉じてしまいました。こんどは下の白い雄しべが開いて花粉を出しています。